

41870

教科書文庫

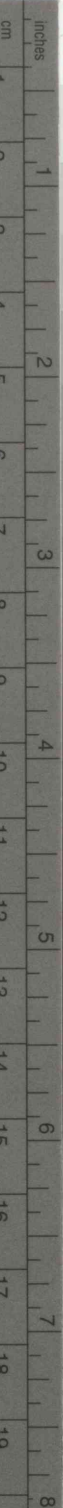
4
815
41-1919
20000 63941

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ka 14
資料室

日本文法教本

文部省檢定濟
金澤庄三郎著

上卷

375.9
Ka14

資料室

文部省檢定濟

大正九年二月五日 中學校師範學校國語科用

文學博士 金澤庄三郎 著

日本文法教本

株式會社 東京開成館藏版



はしがき

本書の世に行はるゝこと既に七年、その間これを實地に用ひられたる結果、教授上の便宜に基づく諸種の意見を寄せられたること少からざるは、著者の深く感謝するところなり。今や本書の全部に改造を加へて、修正第三版を發行せしむ。その主として改訂したるは、およそ次の如し。

- 一、國語教育軌近の趨勢に鑑み、勉めて教授の形式に流るゝを避け、實用を尙ひたること。
- 一、第一篇第二篇、第三篇を通じて言語の類別、品詞の法格を説き、課程の進展に應じて、便宜に教材を按排したること。
- 一、練習問題を刪修し、殊に新に作文造句上の知識を開發せし

はしがき

めんことを勉めたること。

一、敘述の體裁を更新し、主文と補註との別を立てたること。
著者はこの改版によりて教授上に一段の利便を促し、中等教育に於ける國文法教授の目的を達するに容易ならんことを希うて止まざるなり。

大正八年十月

著

者

例言

本書はさきに編纂したる「日本文法教本」を刪修して、新定の教授要目に適合せしめたるものにて、一部二卷四篇より成り、第一篇には言語の類別、第二篇及び第三篇には品詞の法格、第四篇には文章法の大要を説き、別に附録として假名遣大要及び文法上許容すべき事項を上卷末尾に載せたり。

わが國語法は、學者の研究未だ盡くさざるところあり、懸案として保留せらるゝ問題甚だ多く、また學說としては既にほゞ解決したるものもこれを普通教育程度の生徒に説くには便ならざるものあり。今日の中等學校の文法教授がその方法及び效果につきて、とかくの非難を免るゝこと能はざるも、また實に已む

を得ざるに出づ。本書は博く古今の學説を酌み、國語教育の實際に省みて、わが國語の特性として將來に異論の生ずる虞少き文法上の根本知識のみを綜合し、これが統一を試みたるものにて、著者の微意は一部の穩健なる教科書を供給せんとするにあり。本書の内容果してこの企望に副へりや否や。これが今後の改善は偏に大方の深切なる忠言に須たざるべからず。こゝに改版に當りて、申ねて當初編纂の趣旨を明にす。

大正元年八月

上卷目次

第一篇

第一章 口語 文語……………一

第二章 單語の構成……………二

第三章 品詞……………七

 第一節 名詞……………八

 第二節 代名詞……………九

 第三節 動詞……………二一

 第四節 形容詞……………二二

 第五節 副詞……………二四

 第六節 助動詞……………二七

 第七節 助詞……………二八

第八節	接續詞	二〇
第九節	感動詞	二二

第二篇

第一章	名詞の種類	二四
第二章	代名詞の種類及び稱	二六
第三章	動詞の活用	二九
第一節	四段活用 二段活用 一段活用	三〇
第二節	二段活用の二種	三三
第三節	一段活用の二種	三四
第四節	カ行變格活用	三六
第五節	ナ行變格活用	三七
第六節	ナ行變格活用	三九
第七節	ラ行變格活用	四〇
第八節	動詞活用の識別	四一

第四章	動詞の活用の形式	四五
第五章	口語の動詞の活用	五一

第一節	四段活用	五一
第二節	上一段活用	五二
第三節	下一段活用	五四
第四節	カ行變格活用 サ行變格活用	五五
第六章	動詞の活用の假名遣	五六
第七章	動詞の性	六三
第八章	形容詞の活用	六六
第九章	形容詞の活用の形式	六九
第十章	口語の形容詞の活用	七一
第十一章	助動詞の種類	七三

第十二章

助動詞の活用……………

第十三章

助動詞の活用の形式……………

附録

假名遣大要

日本文法教本上巻

文學博士 金澤庄三郎 著

第一篇

第一章 口語 文語

御代が榮える。

御代榮ゆ。

この櫻は美しい。

この櫻は美し。

花が散つた。

花散りたり。

あれは鶯だらう。

あれは鶯ならん。

この例の上の段の如く、談話に用ふる言葉づかひを口語といひ、下の段の如く、文章にのみ用ふるものを文語といふ。

規則

文法の文章(用語)

修辭的文章(日本文)

夫(手)あり

中(林)あり

お(空)・美

口語、文語共に一定の法則あり。これを文法といふ。

○文法は口語と文語と相共通すれども、互に異なるものもまた少からず。以下文語の文法を主とし、必要に応じて、口語の文法をも附載す。

第二章 單語の構成

單語。

花咲く。

學を勉むべし。

この例の花咲く、學を勉むべしなどの如く、文法上言語の單位として取扱はるゝものを單語といふ。單語には數箇の單語の相合して成れるものあり。左にこれを説かん。

熟語。

花、籃……………花籃。

受く、取る……………受け取る。

細し、長し……………細長し。

總ぶ、て……………總べて。

丸し、木、橋……………丸木橋。

この例の花籃受け取る、細長し、總べて、丸木橋などの如く、數箇の單語の相合して一單語となれるものを熟語といふ。

鐵道、道德、勉強、水雷艇、

なども、また熟語なり。

○熟語は、連續の關係より、下なる單語の第一音の濁ることあり。例へば、

花園、松林、見苦し、有難し。

○熟語はまた上なる單語の尾音の變することあり。例へば、

酒樽。白雲。聲色。風向。

疊語。

家々。山々。われ々。

行く々。見る々。長々。

かくの如く、同じ單語の相重りて成りたる熟語を、特に疊語といふ。

○疊語もまた下なる單語の第一音の濁ることあり。例へば、

人々。品々。かへす々。つね々。

接頭語。

み吉野。み空。

さ夜。さ迷ふ。

眞中。眞白し。

た靡く。た易し。

この例のみ、さ、眞、たの如く、他の語の頭に接して一熟語を成すものを接頭語といふ。

○接頭語は獨立に用ひらるゝことなく、その他語に接續するにもおのづから慣例あり。

○接頭語を冠せる熟語も、また下なる單語の第一音の濁ることあり。例へば、

た計る。け高し。眞心。小川。

接尾語。

われら。これら。

憎げ。うれしげ。

高み。重み。

遠さ。 厚さ。

時めく。 春めく。

賢がる。 あはれがる。

鄙ぶ。 大人ぶ。

この例のらげみさめくがるぶの如く、他の語の尾に接して一熟語を成すものを接尾語といふ。

○接尾語もまた獨立に用ひらるゝことなし。

練習問題

- (イ) 熟語及び疊語數箇を案出せよ。
- (ロ) 接頭語とは如何なる語なるか。
- (ハ) 接尾語とは如何なる語なるか。
- (ニ) 次の文の中より熟語または疊語をぬき出せ。
- 一、 木々の梢は青葉の色美し。

二、 猿は木の上より誇顔に人々を見おろせり。

三、 入學志願者は願書並に履歴書をさし出すべし。

四、 店員は原料を買ひ入るゝために九州に出張す。

五、 日本海の戦に露國の艦隊は全滅したり。

(ホ) 次の文の中より接頭語または接尾語を含める熟語をぬき出せ。

一、 長さ三町、幅五間、深さ一間の運河を開けり。

二、 若殿ばらはおもしろがりて自動車を走らす。

三、 吹く風も春めきて、遠山には霞たなびく。

四、 み山の奥の賤が童も君が御代を祝ふ。

五、 われは友だちと小山の上に遊べり。

第三章 品詞

單語はその役目によりて、數多の種類に分つことを得べし。その一つくの種類を品詞といふ。左にこれを説かん。

第一節 名詞

人。鳥。花。山。机。

春。朝。夢。心。

文明。道德。忠。孝。

豊臣秀吉。一宮金次郎。東京。臺灣。

よみかき(讀書)。取調。洗濯。

百。千。一。つ。二。つ。

かくの如く、事物及び数の名稱を示す品詞を名詞といふ。

練習問題

(1) 次の文の中より名詞をぬき出せ。

一。星光る。

二。身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐ。

三。イギリスのステュヴンソンは蒸氣機關を發明せり。

四。少年は盛に運動をなすべし。

五。太陽は西山に入れり。

六。春には花咲き、秋には實結ぶ。

七。朝鮮は人口千二百萬あり。

八。今日の暖さは今年になりて珍し。

(ロ) 次の文の中に適當なる名詞を補入せよ。

一。秀は暖なり。

二。身は毛はよりも輕し。

三。文法は頭はを練るにあり。

第二節 代名詞

われはよく君の心を知れり。

これは何か。
 そこは父の書齋なり。
 川のこなたは花多し。

この例の中なるわれ、君、これ、何、そこ、こなたの如く、名詞の代に用ふる品詞を代名詞といふ。

○名詞代名詞を體言ともいふ。

練習問題

- (1) 次の文の中より代名詞をぬき出せ。
- 一。かしこは學校の庭なり。
 - 二。農夫は山のかなたへ歸りたり。
 - 三。汝の故郷はいづこなるか。
 - 四。それは何といふ書か。
 - 五。あれは僕の家の銀杏の木なり。

アリ(動詞)
 ナリ(形容)
 ナリ(助動)

- 一。君は彼を知るか。
- 二。君は彼を待つべし。
- 三。君は彼の鉛筆なるか。
- 四。かれはいづれの學校の卒業生なるか。
- 五。(口) 次の文の中に適當なる代名詞を補入せよ。

第三節 動詞

鳥飛ぶ。

生徒、字を書く。

かなたに山あり。

この例の中なる飛ぶ、書く、またはありの如く、動作または存在をあらはす品詞を動詞といふ。

練習問題

(イ) 次の文の中より動詞をぬき出せ。

- 一. わが軍、敵と戦ふ。
 - 二. 風鈴風に動く。
 - 三. 終日、机に向ふ。
 - 四. 栗の實、枝より落ちたり。
 - 五. 親の恩は忘るべからず。
 - 六. 善く勉め、また善く遊ぶ。
 - 七. 川に下りて、魚を釣らん。
 - 八. 勉強するものには必ず賞あらん。
- (ロ) 次の文の中に適當なる動詞を補入せよ。
- 一. われは書を 云。
 - 二. 雨 晴れ、月 空たり。
 - 三. 善く 学ば、知識 増す。

第四節 形容詞

この繪は美し。

富士山は高し。

月は地球より小し。

氷は水より輕し。

白き梅の花咲けり。

この例の中なる美し、高し、小し、輕し、白きの如く、事物の有様をあらはす品詞を形容詞といふ。

かれとこれとは價同じ。

櫻花は雲の如し。

この例の中なる同じ、如しは、事物の有様を比較するものにて、また形容詞なり。

○動詞、形容詞を用言ともいふ。

く、し、き、は、れ

練習問題

(1) 次の文の中より形容詞をぬき出せ。

- 一。春は樂し。
 - 二。山ははし。
 - 三。細き川あり。
 - 四。この水は清し。
 - 五。行の正しき友と交れ。
 - 六。心の堅きこと鐵の如し。
- (ロ) 次の文の中に適當なる形容詞を補入せよ。
- 一。友と交れば、益を受くること――。
 - 二。列車は――煙を吐きつゝ進む。
 - 三。川に――橋かゝれり。
 - 四。風吹きて、――夏も忘るゝばかりなり。

第五節 副詞

馬は速に走る。

新築の學校は殆ど落成したり。

この繪は最も美し。

この例の中なる速には動詞走るの意義を限定し、殆どは動詞落成しの意義を限定し、最もは形容詞美しの意義を限定す。かくの如く、すべて動詞・形容詞の意義を限定する品詞を副詞といふ。

副詞は、また副詞の意義を限定することあり。

わが馬は甚だ速に走る。

○形容詞は體言の有様をあらはし、副詞は用言及び他の副詞の意義を限定す。

○副詞は前例の如く、その限定すべき語の直上にあるあり、また左の例の

如く、その間に他の語を挟むことあり。
友は既に商業學校を卒業したり。

練習問題

- (イ) 次の文の中より副詞をぬき出し、いづれの語を限定せるかを述べよ。
- 一 臣として はた 君に忠を盡くすべし。
 - 二 われ 豈 これを知らざらんや。
 - 三 かれは 蓋し中學校の生徒なるべし。
 - 四 二人は や 暫く語り居たり。
 - 五 みだりに 鳥獸を殺すべからず。
 - 六 決して 詐を告ぐべからず。
- (ロ) 次の文の中に適當なる副詞を補入せよ。
- 一 生徒は 出席 せり。
 - 二 こゝより 富士山を望むべし。
 - 三 徳ある者には 人 歸服す。
 - 四 兄は 法律 を學びたり。

五 山水の景色 マダモ 繪に似たり。

第六節 助動詞

學校 に 行く べし。
 學校 に 行き たり。
 學校 に 行か ず。

この例の中なるべし、たり、ずの如く、動詞に結びつきて意義を添ふる品詞を助動詞といふ。

○助動詞には、また左の如く名詞代名詞に結びつくものもあり、助動詞に結びつくものもあり。

東京は日本の首都 たり。
 その寫眞にあるは われ なり。
 その時 われ は三歳 なり き。

練習問題

- (イ) 次の文の中より助動詞をぬき出せ。
- 一。太郎は學校に行けり。
 - 二。明日は動物園に行かん。
 - 三。孝子知事に譽めらる。
 - 四。昔八幡太郎といふ大將ありき。
 - 五。庭の梅も咲きぬ。
 - 六。頼朝義経に平家を討たしむ。
 - 七。雪積りたれば、今年は豊年なるべし。
- (ロ) 次の文の中に適當なる助動詞を補入せよ。
- 一。友と展覽會を見。
 - 二。かの人は某縣知事に任せ。
 - 三。昨日遊び、今日は大いに勉強す。

第七節 助詞

鳥が鳴く。

かれは滿洲に行きたり。

一人の生徒は字を書く。

遅くとも正午までに行くべし。

この例の中なるがは、に、の、を、とも、までの如く、種々の品詞につきて、他の語との關係を示す品詞を助詞といふ。

○助詞はまたてにをは(互爾乎波、天仁遠波)ともいふ。

練習問題

- (イ) 次の文の中より助動詞をぬき出せ。
- 一。親の恩を忘るゝことなかれ。
 - 二。君とわれとは朋友なり。
 - 三。今日は寒けれども、水凍らず。
 - 四。夜のくらきに、雨さへ降り。

- 五。鐵の效用は金銀よりも大なり。
- (四) 次の文の中に適當なる助詞を補入せよ。
- 一。かれ | われ | 導く。
- 二。かれ | われ | 導かる。
- 三。某君 | 父上 | 外國 | 歸られたり。

第八節 接續詞

東京及び大阪は日本の大都會なり。
 美しき徳或は珍しき寶のいづれを望むか。
 空は曇れり、されど雨は降るまじ。

この例の中なる及び或は、されどの如く、語句を接續するに用ふる品詞を接續詞といふ。

練習問題

- (イ) 次の文の中より接續詞をぬき出せ。
- 一。探險の人々は山また山に分け入りたり。
- 二。庭に櫻或は桃を植ゑん。
- 三。馬竝に牛は有用なる獸なり。
- 四。われは藍色もしくは青色を好む。
- 五。風吹き且雨降る。
- (ロ) 次の文の中に適當なる接續詞を補入せよ。
- 一。松島、嚴島、^{及び}橋立を日本の三景と稱す。
- 二。かの地は風光明媚にして、^且人情淳朴なり。
- 三。故郷に歸らんか、^將都に留らんか。

第九節 感動詞

あゝうれし。
 散歩せん。

第二篇

第一章 名詞の種類

普通名詞固有名詞

春來りて山には霞たなびけり。
孝は徳の本なり。

二宮金次郎は相模の農民の子なりき。

この例の中にて、

春、山、霞、孝、徳、本、農民、子

の如く、同種類の事物に通じて用ひらるゝ名詞を普通名詞といひ、また

二宮金次郎、相模

普通名詞

固有名詞

の如く、同種類の中の一つの事物にのみ用ひらるゝ名詞を固有名詞といふ。

數詞。また普通名詞の中にて、

(一) ひとつ、ふたつ、とを、百、千、

(二) 一箇、五本、十枚、百冊、三度、四圓、八斗、六樽

(三) 第一、第二、第三、第四、五つめ、六つめ

の如く、事物の數または順序を示すものを數詞といふ。

練習問題

(1) 名詞の種類を例を擧げて説明せよ。

(2) 次の文の中より名詞をぬき出して、その種類を別て。

- 一。東京の東には筑波山、西には富士山見ゆ。
- 二。文具店にて筆三本と筆記帳二冊とを買へり。
- 三。陸には鐵道通じ、海には航路開けたり。

- 四。大石良雄等四十七人の義士は主の仇を報せり。
- 五。廣瀬中佐は旅順口にて名譽の戦死をなせり。

第二章 代名詞の種類及び稱

人代名詞、指示代名詞。

余は汝を伴をひて、かれを訪ふべし。

われはそれよりもこれを好む。

こゝよりかしこまでは甚だ遠からず。

あちこちの花は皆咲きたり。

この例の中なる

余、汝、かれ、われ、

の如く、専ら人をいふに用ふる代名詞を人代名詞といひ、

人代名詞

指示代名詞

それ、これ、こゝ、かしこ、あち、こち、
の如く、事物、場所、方向をいふに用ふる代名詞を指示代名詞といふ。

人代名詞の稱。人代名詞には、(一)おのれを指すものと、(二)對話の對手を指すものと、(三)第三者を指すものと、(四)何人を指すか明かならぬものとあり。そのおのれを指すものを第一人稱、對手を指すものを第二人稱、第三者を指すものを第三人稱、何人を指すか明かならぬものを不定稱といふ。

第一人稱	わ、われ、僕、余、私、小生、おのれ
第二人稱	な、なれ、汝、君、あなた、おまへ
第三人稱	か、かれ
不定稱	た、たれ、ごなた

指示代名詞の稱。指示代名詞にも、また(一)近きものを指す近稱と、(二)少し隔りたるものを指す中稱と、(三)遠きものを指す遠稱と、(四)何を指すか明かならぬ不定稱との四つあり。

	事	物	場	所	方	向
近稱	こ、これ		こゝ		こちら、こなた	
中稱	そ、それ		そこ		そちら、そなた	
遠稱	あ、あれ、か、かれ		あしこ、かしこ		あちら、あなた、かなた	
不定稱	ど、どれ、いづれ		どこ、いづこ		どちら、いづち	

練習問題

- (4) 代名詞の種類を例を挙げて説明せよ。
- (ロ) 代名詞の稱を例を挙げて説明せよ。
- (ハ) 次の文の中より、代名詞をぬき出して、その種類と稱とを答へよ。
 - 一、それは小生の帽子なり。

- 二、あちらより来るはたれなるか。
- 三、こゝの山を越ゆれば、わが故郷なり。
- 四、そこは暑ければ、こなたへ來給へ。
- 五、こはたが畫きたる繪なるか。

第三章 動詞の活用

- 弟は學校に行かず。
- 弟は學校に行きたり。
- 弟は學校に行く。
- 弟は學校に行けり。

この例の如く、行くといふ動詞の語形は種々に變ず。すべて動詞は、用ひやうの異なるにつれて、語形の變ずるも

のなり。これを活用といふ。

○動詞の活用をなすに、一語の中に變せざる部分と變ずる部分とあり。その變せざる部分を語根といひ、變ずる部分を語尾といふ。前の例のゆく(行)といふ動詞にては、ゆは語根にて、くは語尾なり。

第一節 四段活用 二段活用 一段活用

前例の行くといふ動詞は、カ行の中にてか、き、く、け(即ちア列イ列、ウ列、エ列)に活用せり。

また起く、著るといふ二動詞に就きてこれを見るに、

われは起きず、	われは衣をき(著)ず、
われは起きたり、	われは衣をき(著)たり、
われは起く、	われは衣をきる(著)る、

君も起くるか、 君も衣をきる(著)るか、

かれは起くれども、 かれは衣をきれ(著)れども、
となりて、起くの活用はき、く(即ちイ列、ウ列)及びくにする、れの添ひたるもの、著るの活用はき(即ちイ列)及びきにる、れの添ひたるものなり。これを五十音圖に對照すれば、

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
行く	行	か	き	く	け	こ
起く	起	か	き	く <small>く</small> く <small>くれ</small>	け	こ
著る		か	き <small>きる</small> き <small>きれ</small>	く	け	こ

となりて、行くの活用はカ行の四段に亙り、起くの活用はその二段に亙り、著るの活用はその一段のみなり。されば、行

く^〇の如きを四^〇段活用起^〇く^〇の如きを二^〇段活用著^〇るの如きを一段活用といふ。

○動詞は此の如く五十音圖の同行に活用す。さればカ行に活用するをカ行何段活用、サ行なるをサ行何段活用といふ。

アリテ打消し

夕時ハ必ス四段活用

練習問題

- (イ) 語根と語尾とを説明せよ。
- (ロ) 次の動詞は何行何段活用なるかを説明せよ。
 咲く。 思ふ。 悔ゆ。 恥づ。 見る。 去る。

第二節 二段活用の二種

既に起^〇く^〇の二段活用なることを知りたるが、二段活用にはなほ左の如き種類あり。

われは受^〇け^〇ず、

われは受^〇け^〇たり、

われは受^〇く^〇、

君も受^〇く^〇るか、

かれは受^〇く^〇れども、

これを起^〇く^〇と對照すれば、

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
起 ^〇 く	起 ^〇 か	か	き	く ^〇 く ^〇 く ^〇 くれる	け ^〇	こ
受 ^〇 く	受 ^〇 か	か	き	く ^〇 く ^〇 く ^〇 くれる	け ^〇	こ

となりて、起^〇く^〇は中央より上の二段(イ列、ウ列)に活用し、受^〇く^〇は中央より下の二段(ウ列、エ列)に活用す。されば、更に二段

活用を分類して、起く（一）の如く中央より上に活用するものを上二段活用（二）といひ、受く（三）の如く中央より下に活用するものを下二段活用（四）といふ。

練習問題

- (イ) 上二段活用と下二段活用との區別を説明せよ。
- (ロ) 次の動詞に就きて、その何行何段活用なるかを説明せよ。

榮ゆ。老ゆ。加ふ。教ふ。怖づ。

第三節 一段活用の二種

また、既に著るの一段活用なることを知りたるが、一段活用には、なほ左の如き種類あり。

われは鞠をけ（一）蹴（二）ず。

われは鞠をけ（一）蹴（二）たり、
 われは鞠をける（三）蹴（四）る、
 君も鞠をける（五）蹴（六）るか、
 かれは鞠をけれ（七）蹴（八）れども、
 これを著ると對照すれば、

蹴る	か	き	く	けれ	こ
著る	か	き <small>きる</small> き <small>きれ</small>	く	け	こ
動詞	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列

となる。されば、更に一段活用を分類して、著るの如きものを上一段活用（一）といひ、蹴るの如きものを下一段活用（二）といふ。
 ○上一段活用に屬する動詞は、普通に用ふるは左の數語に過ぎず。

射る。鑄る。著る。似る。煮る。干る。見る。惟みる。鑑みる。

願みる。試みる。居る。用ゐる。率ゐる。

但し、試みるはマ行上二段用ゐるはハ行上二段にも活用す。

○ 下一段活用に属する動詞は蹴るの一語あるのみ。

練習問題

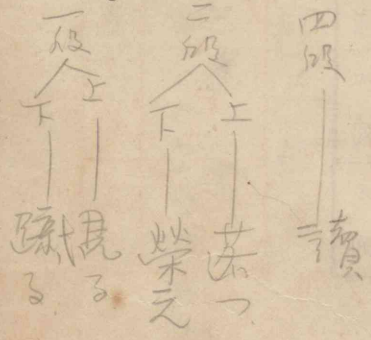
(1) 上一段活用と下一段活用との區別を説明せよ。

(2) 試みるをマ行上二段に、用ゐるをハ行上二段に活用せしむれば如何。

第四節 カ行變格活用

用 用
みみみ へ
れる
ハ行上二段
ハ行上二段

友はこ(來)ず。
友はき(來)たり。
友はく(來)。
友のくる(來)る頃なり。
友はくれ(來)れども。



この例のく(來)といふ動詞の活用を五十音圖に對照すれば

動詞	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
來	か	き	くくく くれ	け	こ

となり、カ行の中にてき、く、こ(即ちイ列、ウ列、オ列)の三段に活用す。これをカ行變格活用といふ。

○ カ行變格活用に属する動詞は來の一語あるのみ。

第五節 サ行變格活用

われはかれを友とせず。
われはかれを友としたり。
われはかれを友とす。

一三。 禁す。

一四。 怒る。

一五。 尋ぬ。

一六。 誘ふ。

一七。 死ぬ。

一八。 訴ふ。

一九。 蹴る。

二〇。 顧みる。

(口) 次の文の中より動詞をぬき出して、その活用の種類を答へよ。

一。 庭に草花の種子を蒔け。

二。 園の草萌え出でたり。

三。 この地は桑を植うるに適せり。

四。 盲人、蛇におちす。

五。 勉めてやまざれば、事つひに成るべし。

六。 山に登りて、港の形を見よ。

七。 波を押し分けて入り来るは、巡洋艦なり。

八。 高木は風に憎まるこいふ諺あり。

九。 平家亡びて、源氏興りたりき。

一〇。 夜明けて、日出でたり。

一一。 君来すば、この處分をいかにせん。

一二。 乃木大將は第三軍を率ゐて、旅順要塞を陥れたり。

一三。 わが國は韓國を併せて、永く禍根を絶ちたり。

第四章 動詞の活用の形式

動詞の語形には各その用法あり。今ナ行變格活用の死ぬといふ動詞に就きてこれを見るに、

一。 死な、 將に死なんとすといふが如く、多く事の將來に成立せんとすることをあらはすに用

ふる形なれば、これを將然形と名づく。

二。 死に、 死に果てたり、死に難しなどの如く、多く用言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連用形と名づく。

將然形

連用形

終止形

三。死ぬ、

「生きたるものは死ぬ」の如く、多く文句を言ひきるに用ふる形なれば、これを終止形と名づく。

連體形

四。死ぬる、

「死ぬる人」の如く、多く體言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連體形と名づく。

已然形

五。死ぬれ、

「國事に死ぬれば、遺憾なし」の如く、多く事の已に確定せるに用ふる形なれば、これを已然形と名づく。

命令形

六。死ね、

「國のために死ね」の如く、命令の意をあらはすに用ふる形なれば、これを命令形と名づく。

以上の將然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六様の

語形を總稱して活用形といふ。

○この六様の名稱は、各その用法の一つに就きて、便宜に命名したるものなれば、この他にもなほ用法ありと知るべし。

四段活用の動詞の活用形

更に四段活用の動詞につきて、六様の活用形を作れば、次の如し。

四段活用

(ナ行變格活用)

(一) 將然形。

書かん、

(死なん、

(二) 連用形。

書き果つ、

(死に果つ、

(三) 終止形。

書く、

(死ぬ、

(四) 連體形。

書く人、

(死ぬる人、

(五) 已然形。

書けば、

(死ぬれば、

(六) 命令形。

書け、

(死ね、

されば、四段活用の動詞もナ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具ふるを見るべし。

○但し四段活用にては、終止形と連體形と相同じく、已然形と命令形とも相同じ。

四段活用以外の諸活用の動詞も、すべて六様の活用形を具ふることに、またナ行變格活用の動詞に同じ。次に諸活用の六様の活用形を表示す。

動詞の活用形の表

活用	動詞	語根	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用	書く	書	か	き	く	く	け	け
上二段活用	起く	起	き	け	く	くる	くれ	き
下二段活用	受く	受	け	け	く	くる	くれ	け
上一段活用	著る		き	き	きる	きる	きれ	き
下一段活用	蹴る		け	け	ける	ける	けれ	け

カ行變格活用	サ行變格活用	ナ行變格活用	ラ行變格活用
來	欲す	死ぬ	有り
	欲 ^{ほつ}	死 ^し	有 ^あ
こ	せ	な	ら
き	し	に	り
く	す	ぬ	り
くる	する	ぬる	る
くれ	すれ	ぬれ	れ
こ	せ	ね	れ

○この表にて、動詞の終止形のイ列の音にて終るはラ行變格活用のみにて、その他は皆ウ列の音にて終るを知るべし。

○ナ行變格活用以外には、皆六様の活用形中に同一語形あるを見るべし。

○四段、ナ行變格、ラ行變格の三活用を除く外は、命令形を用ふるとき、助詞よを伴ふ。例へば、

起きよ。受けよ。著よ。蹴よ。來よ。せよ。

○動詞の連體形は、その下に連なるべき體言省略せられて、名詞の如く用ひらるゝことあり。例へば、

租税を納むる事は國民の義務なり。
言ふ事は易く、行ふ事は難し。

口語の四段活用
の動詞(その一)

第一節 四段活用

文語の四段活用の動詞は口語にありても同じく四段に活用す。例へば、次の如し。

- 將然形。 人は取らない、
- 連用形。 人が取りつく、
- 終止形。 人が取る、
- 連體形。 人が取る時、
- 已然形。 人が取れば、
- 命令形。 人は皆取れ、

文語のナ行變格ラ行變格の兩活用は、口語にては四段活用となる。今、死ぬ、ありの兩語を取りて、その文語と口語とを

口語の四段活用
の動詞(その二)

比較すれば、次の如し。

死		將然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形	備考
な	な		
に	に	文語、ナ行變格活用	備考
ぬ	ぬ	口語、四段活用	
ぬ	ぬ		
ね	ね		
ね	ね		

○口語にては、死ぬ程の病氣ではない、死ぬばそれまでの如く、連體形已然形に、れを添へずして、全く文語の四段活用と同じ。

あ		將然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形	備考
ら	ら		
り	り	文語、ラ行變格活用	備考
る	る	口語、四段活用	
る	る		
れ	れ		
れ	れ		

○口語にては、誰にでも不足はあるの如く、終止形がウ列となりて、全く文語の四段活用と同じ。

第二節 上一段活用

口語の上二段活用
用の動詞

文語の上二段活用は口語にても同じく上一段に活用し、文語の上二段活用もまた口語にては上一段に活用す。

起		著	將然形連用形終止形連體形已然形命令形	備考
き	き	き	き	文語 上一段活用
き	き	き	き	口語 上一段活用
きる	く	きる	きる	文語 上二段活用
きる	くる	きる	くる	口語 上二段活用
き	くれ	き	き	文語 上二段活用
き	き	き	き	口語 上二段活用

○文語の上二段活用は、口語にては、かればはいつも早く起きる、早く起きる人は仕合せだ、早く起きれば氣持がよいの如く、終止形連體形、已然形はき(即ちイ列)に、れの添ひたるものとなりて、全く上一段活用に同じ。

○文語にては命令形によを添ふれども、口語にはよまたはろを添ふることあり。「早く起きよ、早く起きろ」の如し。

第三節 下一段活用

口語の下一段活用
用の動詞

文語の下一段活用は口語にても同じく下一段に活用し、文語の下一段活用もまた口語にては下一段に活用す。

蹴		受	將然形連用形終止形連體形已然形命令形	備考
け	け	け	け	文語 下一段活用
け	け	け	け	口語 下一段活用
ける	く	ける	ける	文語 下二段活用
ける	くる	ける	くる	口語 下二段活用
けれ	くれ	けれ	けれ	文語 下二段活用
け	け	け	け	口語 下二段活用

○文語の下一段活用は、口語にては、上手に球を受ける、球を受ける人、上手に受けければの如く、終止形連體形、已然形は、け(即ちエ列)に、れの添ひたるものとなりて、全く下一段活用に同じ。

○文語にては命令形によを添ふれども、口語にてはよまたはろを添ふることあり。「球を受けよ、球を受けろ」の如し。

第四節 カ行變格活用 サ行變格活用

口語の變格活用
の動詞(その一)

文語の力行變格活用、サ行變格活用は、口語にては稍變じたれども、いづれもなほ特別の活用をなすが故に、各これを變格と稱す。

來		將然形連用形終止形連體形已然形命令形	備	考
こ	こ			
き	き			
くる	く			
くる	くる			
くれ	くれ			
こい	こ		文語、 力行變格活用	
			口語、 力行變格活用	

○口語にては、人が來るの如く、終止形にるを添ふ。

○文語にては命令形によを添ふれども、口語にては、直ぐにこいの如く、いを添ふ。

爲		將然形連用形終止形連體形已然形命令形	備	考
しせ	せ			
し	し			
する	す			
する	する			
すれ	すれ			
しせ	せ		文語、 サ行變格活用	
			口語、 サ行變格活用	

口語の變格活用
の動詞(その二)

○口語にては將然形、命令形に兩様あり。「運動をせぬ」運動をしない以上將然形、「運動をせよ」運動をしろ(以上命令形)の如し。

○口語にては終止形にるを添ふ。「運動をする」の如し。

練習問題

上④ 下① 加② け③

(イ) 口語の活用の種類を挙げよ。

(ロ) 口語と文語との活用の種類を比較せよ。

(ハ) 次の文中の口語の動詞を文語の動詞に改めよ。

- 一、日本は亞細亞の東部にある。
- 二、高い木は風に折れる。
- 三、僕は夜は九時になると直ぐに寝るが、朝は必ず五時前に起きる。
- 四、教へることを善く覺える様にするには、中々注意を要する。
- 五、君はいつも上手に答へる。
- 六、人の壽命は盡きることがあるが、その功績は朽ちることがない。
- 七、君、早くこゝへ來い。
- 八、絶えず勉めるものは、困難な事でも必ず遂げる事ができる。

第六章 動詞の活用の假名遣

動詞の語尾、即ち活用する部分の假名は、紛るゝこと多ければ、その辨別の方法を説かん。

○「かわく」「乾く」「たはむる」「戯る」の如く、語根の假名の紛れ易きは、卷尾の附録に譲りて、今は説かず。

紛れ易き假名

動詞の活用の假名にて、紛れ易きは左の五種とす。

- 一。 ゐ、い、ひ。 (例へば、率ゐ、老い、強ひ)
- 二。 ゑ、え、へ。 (例へば、据ゑ、絶え、堪へ)
- 三。 ろ、ゆ、ふ。 (例へば、据ろ、絶ゆ、堪ふ)
- 四。 じ、ぢ。 (例へば、變じ、怖ぢ)
- 五。 ず、づ。 (例へば、變ず、怖づ)

かくの如きは盡く記憶すること容易ならざれば、その語数の少きものを記憶して、他を推定すべし。

ゐ、い、ひの紛れ易きもの。活用にもゐの假名を用ふる動詞は三語のみにて、い、ひの假名を用ふるは五語のみなり。次の如し。

- ゐ。 率ゐる、用ゐる、ゐ(居)る。 (ワ行上一段活用)
- い。 老い、悔い、報い。 (ヤ行上二段活用)
- ひ(射)る、ひ(鑄)る。 (ヤ行上一段活用)

されば、これらを記憶し置き、他は皆ひの假名と知るべし。例へば、戦ひて、思ひたりなどの如し。

ゑ、え、への紛れ易きもの。活用にもゑの假名を用ふる動詞は三語のみにて、えの假名を用ふるものは普通二十餘語あり。次の如し。

「用ゐる」は八行上二段にも活用す。

る。飢る、植る、据る。(ワ行下二段活用)

え。え(得)。(ア行下二段活用)

甘え、嘶え、癒え、覺え、聞え、消え、越え、肥え、凍え、榮え、泣え、饑え、聳え、絶え、費え、潰え、萎え、煮え、榮え、生え、冷え、殖え、吠え、見え、見え、燃え、萌え、悶え。(ヤ行下二段活用)

段活用

されば、これらを記憶し置き、他は皆への假名と知るべし。

例へば、捕へず、備へたり、戦へりなどの如し。

ら、ゆ、ふの紛れ易きもの。動詞は必ず五十音圖の同行に活用するものなるが故に、上に挙げたる動詞を活用せしむれば、ら、ゆの假名の別を知るを得べし。例へば、「据ら」、「絶ゆ」などの如し。

らへり、ゆへり、ふへり、
らへり、ゆへり、ふへり、
らへり、ゆへり、ふへり、
らへり、ゆへり、ふへり、

されば、その外の活用は皆ふの假名と知るべし。例へば「捕ふ」、「備ふ」、「戦ふ」などの如し。

じ、ぢ及びびず、づの紛れ易きもの。活用にじまたはずの假名を用ふるは、サ行變格活用に屬する動詞と、交ずの一語のみ。されば、その他の活用に屬する動詞は、皆々行にて、ぢまたはづの假名と知るべし。次の如し。

じず。變じたり、變ず、感じたり、感ず。(ザ行變格活用)

交ず。(ザ行下二段活用)

ぢづ。恥ぢたり、恥づ、攀ぢたり、攀づ。(ダ行上二段活用)

秀づ、出づ。(ダ行下二段活用)

練習問題
イの活用を有する動詞を挙げよ。

- (四) いの活用を有する動詞を挙げよ。
- (ハ) るの活用を有する動詞を挙げよ。
- (ニ) えの活用を有する動詞数箇を挙げよ。
- (ホ) じすの活用を有する動詞数箇を案出せよ。
- (ヘ) 次の文の中なる動詞に適當なる活用の假名を補入せよ。
- 一。 絶えず勉むる人は、困難なる任務にも堪下得べし。
- 二。 岩を攀ち山を越えて進めば、深き谷の上に出づ。
- 三。 燈火消えれば、四顧暗黒にして、咫尺も見えず。
- 四。 對岸には山高く、呼ばば將に應へんとす。
- 五。 餓れて穀を種も及ばじ。
- 六。 教へられたる事を善く覺え、實地に應用せんがためなり。
- 七。 信用を重んずる商店は必ず榮ふ。
- 八。 若草萌芽の野邊にて、詩を吟歌を歌などして遊びぬ。

第七章 動詞の性

他動詞。

太郎字を書く。

次郎球を打つ。

この例の中なる書く、打つといふ動作には、必ずその動作の及ぶ字、球などの事物なかるべからず。かくの如き性質の動作を他動といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。

自動詞。

花咲く。

馬走る。

この例の中なる咲く、走るといふ動作には、その動作の及ぶ事物なし。かくの如き性質の動作を自動といひ、自動をあらはす動詞を自動詞といふ。

動詞の性と活用。動詞には、語根を同じくしながら、性の異なるによりて活用を異にするものあり。例へば、折るといふ動詞は、自動をあらはすときには、下二段活用をなし、

雪にあひても柳は折れず。

他動をあらはすときには、四段活用をなす。

雪は柳を折らず。

また性は異なれども、活用は異ならざるものあり。例へば、吹くといふ動詞は、自動をあらはすときにも、他動をあらはすときにも、共に四段活用をなす。

風吹かず。

われは笛を吹かず。

練習問題

(イ) 自動、他動の別を説明せよ。

(ロ) 次の文の中より、動詞をぬき出して、その性をいへ。

- 一。かれは巧に鳥を射たり。
 - 二。晴れたる日には、富士山も見ゆ。
 - 三。舟に乗りて魚を釣る翁を見たり。
 - 四。学校長は講堂に生徒を集めて、式を擧ぐ。
 - 五。村人集りて火を消したり。
 - 六。星やうやく消えて、鶏の鳴く聲遠く聞ゆ。
- (ハ) 次の文の中なる動詞に適當なる語尾を補入せよ。
- 一。塵積つりて山と成る。
 - 二。塵を積みて山と成る。
 - 三。糧食の盡つきまで包圍するは、城を陥とる一法なり。
 - 四。その身は已に死して骨を土中に埋めたれども、その名は永く埋もれどなからん。
 - 五。余は翌日の豫習を終らざれば寝ねす。

(二) 次の諸動詞を自動他動の兩様に用ひて兩様の文句を作れ。

- 一. 開く。
- 二. 裂く。
- 三. 立つ。
- 四. 沈む。
- 五. 笑ふ。
- 六. 進む。

第八章 形容詞の活用

形容詞にも動詞の如く活用あり。

ク活用。

アハ、ヒキ、シキ、ケレ、ケル、シキ、ケル

水清くば、大魚すまじ。

水清し。

清き水流る。

水清ければ、大魚すまじ。

この例の如く、清しといふ形容詞の語尾はくしき、けれの四

様に變化す。かくの如き活用をク活用といふ。

シク活用。

シク、シクシキ、シキ

行正しくば、疑はれじ。

行正し。

正しき行をなせ。

行正しければ、疑はれず。

この例の如く、正しといふ形容詞の語尾はしくしき、しけれの四様に變化す。かくの如き活用をシク活用といふ。

○形容詞の活用はク活用シク活用の二種なり。

○動詞は必ず五十音圖中の同行に活用すれども、形容詞はカ行、サ行の兩行に互りて活用す。

○シク活用にては正し、美しなどの如くなるを普通とすれども、往々悪し、勇まししなどの如く、語尾のしを重ぬることあり。

練習問題

- (イ) 形容詞の活用の種類を述べよ。
 (ロ) 次の諸形容詞の活用を述べよ。
- 一. 重しし 二. 長しし 三. 樂しし
 - 五. 久しし 六. 善しし 七. 惡しし 八. 安しし
 - 九. 廣しし 一〇. 惜しし 一一. 甘しし 一二. 熱しし
- (ハ) 次の文の中より形容詞をぬき出して、その活用の種類を答へよ。
- 一. この池は淺し。
 - 二. 太郎はわが親しき友なり。
 - 三. 新高山は富士山よりも高し。
 - 四. 明き窓の下にてふるき書を読む。
 - 五. 石は堅くして、重し。
 - 六. わかき大將は逞しき馬に乘れり。
 - 七. かれは法律に精し。
 - 八. 水は低き方へ流る。

- 九. 良藥は口ににがし。
- 一〇. わが母は優しき人なり。

第九章 形容詞の活用の形式

ク活用の形容詞清しにつきて、動詞の如く、種々の活用形を作れば、次の如し。

- (一) 將然形 清くば (死なば)
- (二) 連用形 清く澄む (死に果つ)
- (三) 終止形 清し (死ぬ)
- (四) 連體形 清き者 (死ぬる者)
- (五) 已然形 清けれど (死ぬれど)
- (六) (命令形) | (死ね)

即ち形容詞にも、動詞と同じく、種々の活用形ありて、たゞ命令形の闕くるのみなることを知るべし。これを表示すれば、次の如し。

活	用	形容詞語	根	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ク	活用	清し	清	く	く	し	き	けれ	—
シク	活用	正し	正	しく	しく	し	き	しけれ	—

○形容詞にては將然形と連用形と同形なり。

○形容詞には命令形なし。

○形容詞の連用形は用言に連なる形なれば、副詞の用をなすこと多し。

○形容詞の連用形は動詞ありに連なり、約まりてかりとなる。例へば、

善かり、 悪しかり、

の如し。かくなりても、同じく形容詞の用をなす。その活用はラ行變格活用と同じくして、命令形を有す。

○形容詞の連體形は、下なる名詞の略せられて、直ちに名詞の如く用ひらるることあり。例へば、

故き事を温ねて、新しき事を知る。

練習問題

次の諸形容詞を活用によりて類別し、その活用形を表示せよ。

- 一。善し。 二。新し。
- 三。多し。 四。煩はし。
- 五。貧し。 六。篤し。
- 七。怪し。 八。珍し。
- 九。やさし。 一〇。涼し。

第十章 口語の形容詞の活用

魂

口語の形容詞の活用も、ク活用とシク活用との二種なり。されど、文語の形容詞に比すれば、その變化及び活用形共に稍異なり、左の如し。

活用	活用	活用	活用
正 <small>ただ</small>	清 <small>きよ</small>	正 <small>ただ</small>	清 <small>きよ</small>
	く	く	く
しく	く	く	く
しい	い	い	い
しい	い	い	い
しけれ	けれ	けれ	けれ
—	—	—	—
口語	文語	口語	文語

○口語にては、將然形な

○口語にては、終止形、連體形のきをいに變ず。

練習問題

次の文中の形容詞を文語に改めよ。

- 一。高い山に登ると、遠い川や近い村が見えて、景色がよい。
- 二。青い柳が水に垂れて、吹く風も涼しい。
- 三。正しい行をすれば、貧しい家に住んで居ても、心は楽しい。

第十一章 助動詞の種類

普通に用ひらるゝ助動詞を、そのあらはす意義によりて分類すれば、次の如し。

指定の助動詞。

われは支那に行くなり。

この木は櫻なり。

東京は日本の首都たり。

われはわれたり。

この例の如く、なりたりは動作及び事物をそのままに指定す。これらを指定の助動詞といふ。

○助動詞の中にて、名詞、代名詞に附くは、指定のなり、たりの二語のみ。

○口語にては、指定の助動詞に「だ、です」を用ふ。

これは櫻だ。 これは櫻です。

打消の助動詞。

かれは悪人にあらず。
かれは悪人にあらじ。

この例の如く、ず、じは動作を打消す。これらを打消の助動詞といふ。

○口語にては、打消の助動詞に「ぬ、ない」などを用ふ。

行かぬ。 行かない。

推量の助動詞。

かれは行くらむ。
かれは行きけむ。

かれは行くべし。
かれは行くめり。
かれは行くらし。
かれは行くまじ。

この例の如く、らむ、けむ、べし、めり、らし、まじは動作を推量す。これらを推量の助動詞といふ。

○らむ、けむは「らんけん」とも書く。

○口語にては、推量の助動詞に「う、よう、らしい、まい」などを用ふ。

多分行かう。 多分見えよう。

行くらしい。

行くまい。

時の助動詞。 時の助動詞は動作の行はるゝ時をあらはす語にして、過去、未来、完了の三種に分る。

上
信

穢
汚

過去の助動詞

かれは山に登りき。
 かれは學校に行きけり。
 かくの如く、むはけりは動作の既に前に行はれしことをあらはすものなれば、これを過去の助動詞といふ。

未來の助動詞

われは山に登らむ。
 われは學校に行かむ。
 かくの如く、むは動作の今より後に行はれんとすることをあらはすものなれば、これを未來の助動詞といふ。

完了の助動詞

かれは山に登りぬ。
 かれは學校に行きつ。
 かれは山に登りたり。
 かれは學校に行けり。

時の助動詞の併用

かくの如くぬつたりは動作の全く終了したることをあらはすものなれば、これを完了の助動詞といふ。

○むはんども書く。

○時の助動詞のたりは動詞、助動詞に付き、指定の助動詞のたりは名詞、代名詞につく。

○口語にては、時の助動詞にたう、ようなどを用ふ。例へば、

行つた。

見た。

行かう。

見よう。

以上の時の助動詞は、これを併用することあり。

われは昨日行きたりき。

春雨降りき。

これは完了の助動詞と過去の助動詞とを併用したるものにて、動作が過去に於て既に終了したることをあらはせり。

かくの如きを過去完了といふ。

明日行くとも花は既に散りたらむ。

これは完了の助動詞と未来の助動詞とを併用したるものにて、動作が未来の或時に於て既に終了してあるべきことをあらはせり。かくの如きを未来完了といふ。

使役の助動詞。

父は太郎を東京に行かす。

父は太郎に草花を植ゑさす。

父は太郎を東京に行かしむ。

この例の如く、す、さす、しむは他の者に動作をなさしむることをあらはす。これらを使役の助動詞といふ。

受身の助動詞。

われは級長に選ばる。

われは總代に擧げらる。

この例の如く、る、らるは他より動作をしかけらるゝことをあらはす。これらを受身の助動詞といふ。

可能の助動詞。

われは一日に十里歩まる。

われは困難に堪へらる。

われは一日に十里を歩むべし。

この例の如く、る、らる、べしは動作をおのれ能くなし得ることをあらはす。これらが可能の助動詞といふ。

○べしは推量の助動詞なるが轉じたるなり。

尊敬の助動詞。

母上も大いに喜ばる。

先生歸省せらる。

殿下知事を召さす。

殿下競技を御覽ぜさす。

この例の如く、る、らる、す、さすは他の動作を尊敬していふことをあらはす。これらを尊敬の助動詞といふ。

○る、らるは可能の助動詞、す、さすは使役の助動詞なるが、轉じたるなり。

○す、さすは多く給ふといふ動詞または尊敬をあらはすとすると連接す。

書を讀ませ給ふ。

書を讀ませらる。

庭前に出でさせ給ふ。

庭前に出でさせらる。

希望の助動詞。

われは行きたし。

この例の如く、たしは動作を希望することをあらはす。これを希望の助動詞といふ。

命令の助動詞。

汝行くべし。

この例の如く、べしは動作を命令することをあらはす。これを命令の助動詞といふ。

○べしは推量の助動詞なるが轉じたるなり。

助動詞の種類を表。

(一) 指定の助動詞	なり、たり
(二) 打消の助動詞	ず、じ
(三) 推量の助動詞	らむ、けむ、べし、めり、らし、まじ

(四) 時の助動詞	き、けり、む、ぬ、つ、たり、り
(五) 使役の助動詞	す、さす、しむ
(六) 受身の助動詞	る、らる
(七) 可能の助動詞	る、らる、べし
(八) 尊敬の助動詞	る、らる、す、さす
(九) 希望の助動詞	たし
(一〇) 命令の助動詞	べし

練習問題

- 一 指定のたりと時のたりとは各如何なる品詞に附くかを述べよ。
- 二 (口) べし、らる、す、さすは助動詞の何々の種類に互りて用ひらるゝかを述べよ。
- 三 (ハ) 次の文中の施線の語は、如何なる意をあらはせるかを述べよ。
- 四 一世のため、盡くすは、人たるもの務なりと、古人もいはれたり。
- 五 人に語らせて、楽しげに聞かせ給ふ。

第十二章 助動詞の活用

三. 風に誘はれて散る花よりも、人の心は頼まれぬものなり。

四. 常に勉強すべしと訓戒せられしは、これがためなるべし。

かれは今朝行きたらむ。

かれは今朝行きたり。

かれは今朝行きたるべし。

かれは今朝行きたれども歸らず。

この例に見るが如く、助動詞にもまた活用あり。次にこれを説かん。

動詞の下二段活用に等しきもの。つ、す、さす、しむ、る、らるの六助動詞の活用は動詞の下二段活用に等し。

つ	て	つ	つる	つれ
す	せ	す	する	すれ
さす	させ	さす	さする	さすれ
しむ	しめ	しむ	しむる	しむれ
る	れ	る	るる	るれ
らる	られ	らる	らるる	らるれ

○す、さすは使役、尊敬いづれの助動詞としても、活用相同じく、またらるるは受身、可能、尊敬いづれの助動詞としても、活用相同じ。

○口語しては、これらの下二段活用に等しき活用をなす助動詞の下一段活用に等しき活用をなすこと、動詞の場合と同じ。

動詞のナ行變格活用に等しきもの。ぬといふ助動詞の活用は動詞のナ行變格活用に等し。

ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
---	---	---	---	----	----	---

動詞のラ行變格活用に等しきもの。なり、たり(指定)、めり、けり、たり(時)りの六助動詞の活用は、動詞のラ行變格活用に等し。

なり	なら	なり	なる	なれ
たり	たら	たり	たる	たれ
めり	—	めり	める	めれ
けり	—	けり	ける	けれ
たり	たら	たり	たる	たれ
り	—	り	る	れ

○指定の助動詞たりも、時の助動詞たりも、その活用相同じ。

形容詞の活用に等しきもの。べし、たし、まじの三助動詞の活用は、形容詞の活用に等し。

べし	べく	べし	べき	べけれ
----	----	----	----	-----

たし	たく	たし	たき	たけれ
まじ	まじく	まじ	まじき	まじけれ

○べしは推量、可能、命令、いづれの助動詞としても、活用相同じ。
 ○たしは口語にてく、い、けれと活用すること、また口語の形容詞のク活用の如し。

特殊の活用をなすもの。ずむ、らむ、けむ、き、の五助動詞の活用はいづれも動詞または形容詞の活用と異なり、その状左の如し。

ず	む	らむ	けむ	き
ず、ぬ、ね	む、め	らむ、らめ	けむ、けめ	き、し、しか

○じ、らしといふ二助動詞には活用なし。

練習問題

次の文の中より助動詞をぬき出して、その種類と活用とを答へよ。

- 一、明日は必ず霽れむ。
- 二、弟は今朝學校に行けり。
- 三、われは曾て奈良に遊びき。
- 四、汝等は生徒たる本分を守るべし。
- 五、寺内伯は最初の朝鮮總督に任せられぬ。
- 六、今年も豊年なるべし。
- 七、兄は新に入學したる弟を寄宿舎に入らしめたり。
- 八、この由を告げさせしかば、父は安心せられたり。
- 九、學者たらむものの心掛は、かくこそありたけれ。
- 一〇、母の訪はれしは、いつなりけむ思ひ出でられず。

第十三章 助動詞の活用形式

助動詞の活用形

- (一) 將然形。 行きなむ。 (死なむ)
- (二) 連用形。 行きにけり。 (死にけり)
- (三) 終止形。 行きぬ。 (死ぬ)
- (四) 連體形。 行きぬる人。 (死ぬる人)
- (五) 已然形。 行きぬれど。 (死ぬれど)
- (六) 命令形。 行きね。 (死ね)

この例の如く、助動詞にも動詞と同じく種々の活用形あり。次にこれを説かん。

動詞のナ行變格活用に等しき活用の助動詞の活用形。 前

の例にて見るが如く、ナ行變格活用に等しき活用の助動詞は、ナ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

動詞の下二段活用に等しき活用の助動詞の活用形。 下二段活用に等しき活用の助動詞は、また下二段活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	て
す	せ	せ	す	する	すれ	せ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れ
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られ

○動詞の下二段活用に等しき活用の助動詞も、また下二段活用の動詞と同じく、命令形に助詞のよを伴なふ。例へば、
われをして行かしめよ。

○る、らるは、可能の助動詞として用ひらるゝときは、命令形なし。
これらの助動詞の口語の活用形は、下一段活用に似たり。

せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させ
れる	れ	れ	れる	れる	れゝ	れ
られる	られ	られ	られる	られる	られゝ	られ

動詞のラ行變格活用に等しき活用の助動詞の活用形。ラ行變格活用に等しき活用の助動詞は、またラ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
めり	めら	めり	めり	める	めれ	—
けり	けら	けり	けり	ける	けれ	—
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	—
り	ら	り	り	る	れ	—

表中「」符の活用形は今多く用ひられず。

(指定の助動詞)

(時の助動詞)

○たりは、指定の助動詞にては命令形あれども、時の助動詞にては命令形なし。

時のたりは口語にてはたととなり、次の活用形を具ふ。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
た	たら	—	た	た	たれ	—

形容詞に等しき活用の助動詞の活用形。形容詞の活用に等しき活用の助動詞べし、たし及びまじは、形容詞と同じく五様の活用形を具へ、命令形なし。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	—
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	—
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	—

たしは口語にては、く活用の口語の如く、次の活用形を具ふ。

たい	—	たく	たい	たい	たけれ	—
----	---	----	----	----	-----	---

特殊の活用をなす助動詞の活用形。特殊の活用をなす助動詞づにつきて、種々の活用形を作るに、次の如し。

- (一) 將然形。 行かずば。 (死なば)
- (二) 連用形。 知らず過ぐ。 (死に果つ)
- (三) 終止形。 行かず。 (死ぬ)
- (四) 連體形。 行かぬ人。 (死ぬる人)
- (五) 已然形。 行かねど。 (死ぬれど)
- (六) 命令形。 — (死ね)

またむらむ、けむ、きにつきて種々の活用形を作るに、その終止形、連體形、已然形は左の如し。

- (三) 終止形。 行かむ、 行くらむ、 行きけむ、 行きき。

(四) 連體形。

行かむ者、行くらむ者、行きけむ者、行きし者、已然形

(五) 已然形。

行かめど、行くらめど、行きけめど、行きしかど。

而して將然形、連用形、命令形は共に闕けたり。

次にこれらの特殊の活用をなす助動詞の活用形を表示す。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	—
む	—	—	む	む	め	—
らむ	—	—	らむ	らむ	らめ	—
けむ	—	—	けむ	けむ	けめ	—
き	—	—	き	し	しか	—

○きは連體形しを以て終止することあり。例へば、

已然形
 連體形
 終止形
 連用形
 將然形
 命令形

火災は二時間に亘りて鎮火せざりし。
 ○らしは、口語にては次の活用形を具へ、シタ活用の形容詞の口語に似たる活用をなす。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らしい	—	らしく	らしい	らしい	—	—

練習問題

次の文の中なる助動詞の活用形を答へよ。

- 一。 答案をば筆にて書かす。
- 二。 子を農學校に入らしむ。
- 三。 噂せらるゝ程の大事件にはあらず。
- 四。 雪ならば、消ゆべし。
- 五。 過ぎつる方をおもひ出でぬ。
- 六。 善しと知りなば、直にこれを行へ。
- 七。 正しき道にこそわれは行くべけれ。

八。今にして改めずば、必ず悔あらむ。

日本文法教本上巻終

附録

假名遣大要

その一 國語假名遣

國語假名遣

- (一) 瞻、井。
- (二) 柄、餌。

この例の(一)は二語共にいこいひ、(二)は二語共にえといへど、これを假名にて書くときは、

- (一) い||瞻、わ||井。
- (二) え||柄、ゑ||餌。

と書き分けざるべからず。およそ國語を假名にて書くには、昔より一定の法あり。これを國語假名遣といふ。

紛れ易き假名

國語假名遣にて紛れ易き假名は次の如し。

一語の上

一語の上にては、へは紛る、ことなく、ゑと書くもの甚だ
少くして、およそ左の如し。

ゑ(餌)

ゑ(繪)

ゑ(ぼ)

ゑ(繪)

ゑ(ぼし)

ゑ(んじゆ)

ゑ(笑)

ゑ(醉)

ゑ(彫)

ゑ(朝)

ゑ(嘔吐)

ゑ(酸)

これらの外は、大抵えと書くべし。

一語の中と下と

一語の中と下とにては、え及びゑと書くもの甚だ
少く、大抵はへと書くべし。そのえと書くものは、およそ左の如し。

(一) ふえ(笛)

ぬえ(鶴)

はえ(鮑)

ひえ(稗)

ひえ(ごり)

さゝえ(榮螺)

きのえ(甲)

(二) 語尾のえ、ゆと變るもの。

こえ(越)

きこえ(聞)

.....

またゑと書くものは、およそ左の如し。

(一) つゑ(杖)

する(末)

こず(稻)

つくゑ(机)

いしずゑ(礎)

するもの(陶器)

ゆゑ(故)

こゑ(聲)

(二) 語尾のうゑと變るもの。

うゑ(種)

うゑ(飢)

する(握)

三 お、を、ほの紛れ易きとき。

一語の上

一語の上にては、ほは紛る、ことなく、をと書くもの甚だ
少くして、およそ左の如し。

(一) を(緒)

を(麻)

を(種)

を(箴)

を(筆)

を(陸面)

を(小)

を(ち)

を(伯母、叔母)

を(ひ)

を(雄)

を(と)

をんな <small>(女)</small>	をとめ <small>(少女)</small>	を尾
をばな <small>(尾花)</small>	をかづき <small>(鬚鼠)</small>	をとつひ <small>(二昨日)</small>
をとゞし <small>(二昨年)</small>	をさ <small>(長)</small>	をち <small>(遠)</small>
を二 <small>(痴)</small>	をし <small>(鴛鴦)</small>	をこぜ <small>(臙)</small>
をろち <small>(大蛇)</small>	をぎ <small>(莖)</small>	をけら <small>(鹿)</small>
をの <small>(芥)</small>	をり <small>(檻)</small>	をり <small>(箭)</small>
をり <small>(居)</small>	をる <small>(折)</small>	をさむ <small>(治納收)</small>
をしふ <small>(敷)</small>	をざる <small>(廟)</small>	をがむ <small>(拜)</small>
をの <small>(く)</small> <small>(慄)</small>	をふ <small>(終)</small>	をめく <small>(叫)</small>
をし <small>(愛惜)</small>	をさなし <small>(幼)</small>	をさく <small>(天抵)</small>

(二)を(書)を(讀)む(字)を(書)く(な)の(を)

これらの外は、大抵おと書くべし。

一語の中と下と

一語の中と下とにては、おと書くものなく、をと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

あを <small>(毒)</small>	さを <small>(竿)</small>	とを <small>(子)</small>
うを <small>(魚)</small>	かつを <small>(鱈)</small>	さつを <small>(獵夫)</small>
みを <small>(露)</small>	いさを <small>(功)</small>	みさを <small>(操)</small>
わざを <small>(ぎ)</small> <small>(俳優)</small>	かを <small>(り)</small> <small>(香)</small>	しを <small>(り)</small> <small>(寒)</small>
たを <small>(や)</small> <small>(め)</small> <small>(手弱女)</small>	しを <small>(る)</small> <small>(萎)</small>	まを <small>(す)</small> <small>(申)</small>
あを <small>(む)</small> <small>(仰)</small>	たを <small>(や)</small> <small>(か)</small> <small>(に)</small> <small>(病那)</small>	やを <small>(ら)</small> <small>(徐々)</small>

これらの外は、大抵ほと書くべし。

四 は、わの紛れ易きとき。

わと書くもの

はとわとは、一語の上にては紛るゝことなし。一語の中と下とにては、わと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

あわ <small>(池)</small>	しわ <small>(皺)</small>	くつわ <small>(襪)</small>
くるわ <small>(廊)</small>	くわ <small>(る)</small> <small>(慈姑)</small>	いわ <small>(し)</small> <small>(鱒)</small>
はらわ <small>(た)</small> <small>(腸)</small>	ことわり <small>(理斷)</small>	ことわざ <small>(諺)</small>

たわやめ(手弱女)

さわやかに(爽)

*ゆわう(疏黄)

あわつ(周章)

さわぐ(騒)

かわく(乾)

たわむ(撓)

よわし(弱)

これらの外は、大抵はと書くべし。

五

ふ、うの紛れ易きとき。

うと書くもの

ふとうとは一語の上にては紛るゝことなし。一語の中と下とにては、うと書くもの甚だ少くして、左の如し。

(一) 語尾のう、ゑと變るもの。

う(植)

う(飢)

す(据)

(二) 音便にてうと書くべきもの。

これらの外は、大抵ふと書くべし。

六 じ、ぢの紛れ易きとき。

じと書くもの

よそ左の如し。

(一) うな(項)

ある(主)

ご(主婦)

むら(連)

ひ(聖)

に(虹)

つ(辻)

つむ(旋風旋毛)

き(雉)

ひつ(羊未)

む(貉)

か(鮒)

う(蛆)

つ(躑躅)

は(植)

は(椒生薑)

ひ(鹿尾菜)

く(蘭)

*さ(匙)

こ(鐘)

や(鋸)

さ(棧敷)

は(始)

ま(咒)

か(憔悴)

く(挫)

ま(扶)

な(馴染)

な(詰)

に(染)

に(啄)

は(彈)

ま(交)

た(辟易)

み(身動)

み(短)

じとぢとの中にて、じと書くものは甚だ少くして、お

いちじるし(著) かたじけなし(辱)

(二) 語尾のじずと變るもの。

おもんじ(重) やすんじ(安)

(三) 語尾のじじきと變るもの。

おなじ(同) すさまじ(荒涼)

(四) 上にし(の)の假名を受くるもの。

しじみ(蜆) しじら(鱧)

(五) じ(讀まじ)三書かじなどのじ。

これらの外は大抵ぢと書くべし。

七 ずづの紛れ易きとき。

ずと書くもの ずとづとの中にてずと書くものは甚だ少くして、お

よそ左の如し。

(一) もず(鴨)

ねずみ(鼠)

みづ(蚯蚓)

くず(葛)

ずみ(梅)

ひずみ(歪)

こず(杓)

いしず(礎)

はず(筥)

かず(敷)

さず(傷)

はずみ(機)

たずむ(行)

なずらふ(獲)

かならず(必)

(二) 語尾のじずと變るもの。

おもんず(重)

やすんず(安)

(三) 語尾のぜずと變るもの。

まぜ(交)

(四) 上にす(の)の假名を受くるもの。

すず(鈴)

すずき(鱧)

すずめ(雀)

すずな(慈)

すずしろ(蘿蔔)

すずり(硯)

すずろ(漫)

すずし(生絹)

すずし(涼)

(五) ず(讀まじ)三書かじなどのず。

これらの外は大抵づと書くべし。

その二 字音假名遣

字音假名遣

- (一) 鶯
- (二) 押
- (三) 歐
- (四) 王
- (五) 翁

これらの漢字は、皆「オ」の如く發音すれど、これを假名にて書くときは、
 (一) あう、 (二) あふ、 (三) おう、 (四) わう、 (五) をう、
 とやうに書くを正しとす。かくの如く、字音を假名にて書くには、昔より一定の法あり。これを字音假名遣といふ。

字音假名遣につきての心得 一つ／＼の漢字の字音假名遣を明かにすることは、甚だ難ければ、必要なるときには、字書につきてこれを求むべきなり。今次に、廣く字音假名遣につきて心得おくべきこと數條を示す。

文字の構造の相通する漢字の字音假名遣

當 堂 黨 たう
 同 筒 洞 とう

この例の如く、構造に相通するところありて、發音の相似たる漢字の字音假名遣は、大抵相同じ。但し、例外ありて、例へば、工、紅、虹などは、こなれど、江はかうなり、寺はじなれど、持、峙はぢなり、朮はぢゆつなれど、述、術はじゆつなり、女はぢよなれど、汝、如はじよなるが如し。

字音假名遣は同行に通ふ

委 わい
 惟 わい
 員 むん
 音 いん
 庵 あん
 寅 いん
 倭 わい
 淮 わい
 圓 むん
 暗 あん
 掩 えん
 演 えん

この例の如く、構造に相通するところありて、發音の同行に通ふ漢字

の字音假名遣は、大抵同行に通ふ。但し、これにも例外あり。例へば、
隠はいんなるに、穩はをんなるが如し。

三

愛	……あい	海	……かい
生	……せい	丁	……てい
水	……すゐ	類	……るゐ

この例の如く、字音假名遣にては、ア列またはエ列の下にて「イ」と發音するものの「イ」音は「い」と書き、ウ列の下にて「イ」と發音するものの「イ」音は「ゐ」と書くべし。

四

合併	……がつぺい	合同	……がふごう
立體	……りつたい	建立	……こんりふ

この例の如く、促音にも長音にも發音する漢字にては、その長音を書くに、終の假名をふとす。

ウ列の下にはゐと書く

促音にも讀む漢字の長音

漢音に「エイ」の音を含む漢字の吳音

五

正當	……せいたう	正月	……しやうぐわつ
平均	……へいさん	平等	……びやうどう
規定	……きてい	約定	……やくぢやう
有名	……いうめい	本名	……ほんみやう

この例の如く、漢音には「エイ」の音を含み、吳音には「ヨ」の音を含む字にては、その「ヨ」をやうと書くべし。

六

公平	……こうへい	公家	……くげ
口上	……こうじやう	口授	……くじゆ
出頭	……しゆつとう	頭巾	……づきん
奉公	……ほうこう	奉行	……ぶぎやう
供給	……きやうきふ	供物	……くもつ

この例の如く、漢音には「オー」「ヨ」の音を含み、吳音にはウ列の音を含

吳音にウ列の音を含む漢字のオ列の長音

大正三十二年臨時定價 金五拾四錢



大正元年八月七日印
大正元年九月廿七日訂正再版發行
大正八年十二月廿四日修正三版發行
大正八年十二月廿七日修正三版發行
大正元年八月十日發行
大正元年九月三十日訂正再版發行

著者 金澤庄三郎
發行所 株式會社東京開成館
代表者 渡邊良助
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行所 株式會社東京開成館
振替貯金口座東京第五參貳貳番
大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
西部販賣所 三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地
東部販賣所 林平次郎

日本文法教本
上卷定價金參拾錢

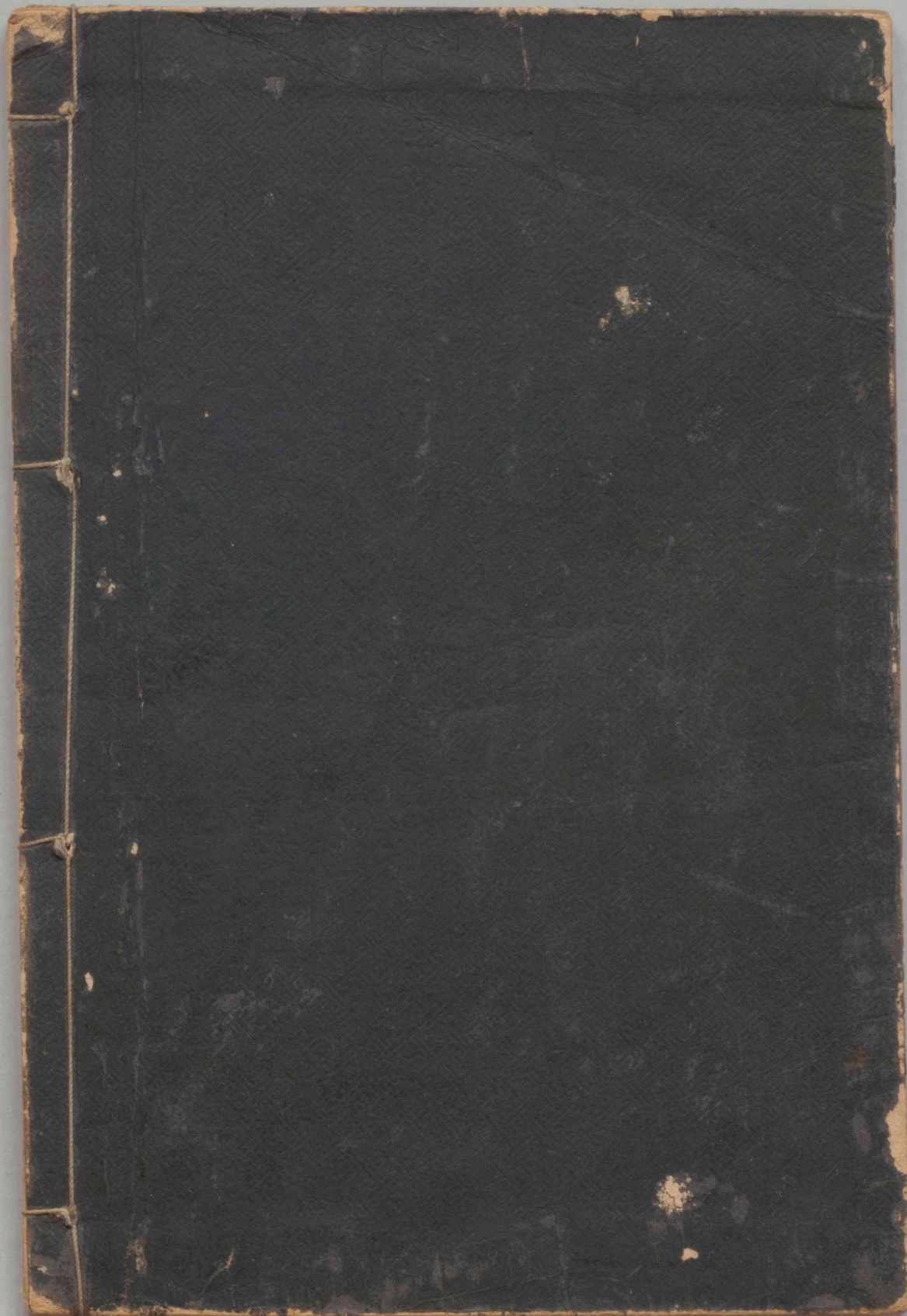
常磐印刷所印

上卷附錄

む字にては、その「オ」及び「ヨ」の音を共にオ列の假名にうを附けてあらはすべし。

第六學級
保田史郎

第六學級及保田史郎



	活用	一 下二級活用	二 四級活用	三 四級活用	四 上二級活用	五 上三級活用	六 四級活用	七 上二級活用	八 四級活用	九 下三級活用	十 四級活用	十一 下二級活用	十二 下二級活用	十三 下二級活用	十四 下二級活用	十五 下二級活用	十六 下二級活用	十七 下二級活用	十八 下二級活用	十九 下二級活用	二十 下二級活用
	活用	辟く	耕る	突く	見る	開く	開く	煮る	果す	得	讀む	覚む	断つ	助し	顯る	追ふ	治す	載す	加ふ	行	
	語根	辟	耕	突	見	開	開	煮	果	得	讀	覺	断	助	顯	追	治	載	加	行	
	為然形	ヶ	ら	カ	ミ	は	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	
	連用形	ヶ	リ	キ	ミ	ぢ	ハ	ニ	シ	エ	ミ	エ	チ	ケ	レ	ハ	メ	サ	シ	ゾ	
	終止形	ク	ル	シ	ミ	フ	ス	ル	ス	ル	ム	フ	フ	ル	ル	ル	ル	ス	ス	ル	
	連体形	ル	ル	ク	ミ	フ	ス	ル	ス	ル	ム	フ	フ	ル	ル	ル	ル	ス	ス	ル	
	已然形	ル	ル	ケ	レ	フ	セ	レ	セ	レ	ム	テ	テ	ル	ル	ル	ル	セ	セ	ル	
	命令形	ケ	ル	ケ	ミ	フ	セ	ニ	セ	エ	ム	テ	テ	ル	ル	ル	ル	セ	セ	ル	

打消す使つた故に語尾を閉つた

